

戦争体験を語らなかつた母

常任理事 小川豊子

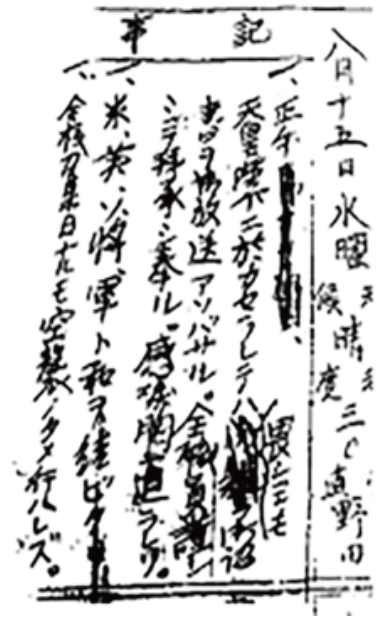
終戦の日の日直

「天皇陛下ニ於カセラレテハ畏レオオクモ御召書ヲ御放送アソバサル。全職員謹ミテ拝承シ奉ル。感涙胸ニ迫ラレリ。」

1945年8月15日の柏原小学校の学校日誌。記載者は当日日直の母である。母は、1929年に埼玉師範を卒業しその後40年間教師を務めた。その間、教育が「お国のためから民主主義へ」と真逆に変化した時を体験。多くの教師が自責の念にかられ辞めていったというが、母は続けた。

私は、当時の母の思いを何回も訊ねたが返事はいつも「忘れたなあ」の一言。だから、戦争の話をもつた母から聞くことは少なかった。

しかし、その答えらしきことが聞けたのは、今から27年前、6年生担任の教師がこの学校日誌を使って社会科の授業をした時の事。講師を依頼された母は、6年生に当時のことを語った。



赤紙がきた教え子の壮行会で

別れの盃を酌み交わす時、相手にだけに聞こえる声で「いいか、生きて帰って来いよ。穴があったらそこへ飛び込め、木があったその陰に隠れろ。必ず生きて帰って来いよ。」「あに言ってんだよ、先生。先生は、お国のためには死をも覚悟って教えてきたのに。」「あに、お前の母ちゃんは、お前を戦争で死なせるために産んだのではないぞ。お前が生きて帰ってくるのを心の底から思っているのだぞ。」そう言い合い、じっと見つめ合う目から互いに涙して頷きあった。しかし、教え子は帰ってこなかった。

その後、靖国神社に行くと、自分にとっては多額の賽銭をあげて祈る。お金ではどうしようもないけど、償う。

茶畑にかくれた空襲警報

空襲警報が出て、児童の下校に付いていった時。円光寺あたりまでくると、戦闘機の機体が光っているのが見えた。慌てて児童を茶の木の下に潜り込ませ、自分も潜った。すると、すぐ目の前の砂利道を、バリバリバリ!という凄まじい音と土煙。子供たちが撃たれているのではと、頭は真っ白。腰抜け状態になっていた。子供たちの「先生!大丈夫かあ!」の声に恐る恐る出て、人数を数えると全員がいた。ほっとしてまた腰を抜かし、笑う子供たちに腕を支えられた。

あれから30年後に詠む。

学童と 根に伏し爆撃のがれたる 茶畑に今は住宅ならぶ

今の平和の尊さを、人と生きることの素晴らしさを、世界の国の人々と語り合うことの大切さを涙ながらに子供たちに語る母。戦後48年目に聞いた母の思い、やっと理解できたように思った。母は、忘れてなどいなかった、語りたくなかった、語れなかったのだ。



柏原の円光寺

編集後記

- ★新型コロナウイルスは収束が見通せず、感染拡大防止で活動も制約、成果発表の目標がないので、私も熱が入らない。その中で、文団連は2月の芸術祭、4月の桜まつりの実行委員会を立ち上げた。どうしたら開催可能かを皆で考えたい。
- ★小川豊子さんのお母さんの戦争体験。私も小学生でしたが、よくわかります。ありがとうございます。

(高沢正夫)